

【書評・紹介】

西村幹也 著 『もっと知りたい国 モンゴル』

(東京, 心交社, 2009年4月, 229頁, 1500円+税)

石井智美

1 はじめに

わが国において、海外の国や地域、民族についてシリーズで紹介する本が、これまでも多彩な切り口によって出版されてきた。モンゴルについても、様々な専門分野の書き手によって紹介されている。

今日、IT が 10 年前には多くの人々が予想もしなかった速度で世界をつなぎ、グローバル化が進んだようでありながら、果たして本当にそうだと言えるのかと、我々は今考え始めているのではないだろうか。そうした中、本書は、本学会員の西村氏によって「もっと知りたいシリーズ」の1冊として書かれた。西村氏の視線は、モンゴルの人に真っすぐに向けられ、モンゴルの魅力とともに、抱える矛盾についても語っている。

西村氏は、日本で学生生活を送った後、中華人民共和国国内モンゴル自治区の大学へ 1991 年 1 月から 7 月まで。そして 1992 年から 1993 年と、1997 年から 1998 年までモンゴル国の大学へと、豊富な留学経験を持たれている。そこでの恩返しとして、現在 NPO 法人を立ち上げ、全国横断の内陸アジア民族音楽コンサートなどを行ない日夜、東奔西走されている。

その片手にはいつも愛機がある。本書に収録されている写真はその愛機によって西村氏が撮影したものだ。掲載された写真の全てがカラーではないことが残念だが、西村氏でなければ決して撮り得ない状況の写真がさりげなく載せられている。人物を写したのものからは、被写体となった人の西村氏への信頼感が伝わってくる。フィールドで人を対象とした写真を撮ることには、レンズを向ける側の姿が逆照射されてくるものだ。

近年写真に写った対象の「肖像権」が問題になっている。その背後には、これまでの研究者を含め、写し手に対して被写体側の不信感がある。このことは、フィールドに関わる者、1人1人の姿勢が問われ、対応を求められている。本書の中で西村氏は調査として、研究者が何気なく人を対象としての写真を撮っていることに対して発言されている。そこには1個人の熱い思いがある。フィールド調査をする者として、良心の問題も含め、なかなか研究の背後にある大きな問題ながら語られることは少ない。しかしこの本は、真摯に向き合う人間力で貫かれていることが大きな魅力である。そんな本書の構成はつぎのようになっている。

目次

もっと知りたい国 モンゴル

第1章 モンゴルというところ

第2章 街に生きる

表紙画像

- 第3章 草原に生きる
- 第4章 タイガに生きる
- 第5章 アルタイ山脈に生きる
- 第6章 共に生きる

2. モンゴルとは

今日、日本においてモンゴルというと相撲の力士の出身国、英雄ジンギスハーンを連想する人が多い。そしていつからか、モンゴルは日本人にとって近しい国であるような印象を持っている。果たしてその通りであるか、イメージだけが先行してしまっているのかについては個人差があるとは思いますが、モンゴルに関する著作は、モンゴル国の人口などから考えてみると、意外な思いがするほどに多いのだ。

何かと話題を提供し続けている横綱朝青龍が「なぜあのように行動するのか」について、西村氏は直接言及されてはいない。しかし横綱朝青龍の行動のバックボーンである遊牧文化について考えることで、見えてくるものがあるのではないかと。

日本においてモンゴルへの関心が生まれたのは、中国大陸への関心が高まった近代になってからである。そこで「モンゴルとは何か」ということを考えてみたい。モンゴル、モンゴル国、内蒙古自治区となると知っているようであるが、正確に分かってはいないことに気がつく。そんな知っているようであるがまだ知らないモンゴルについて生き生きと伝えてくれるのが本書である。

「第6章 共に生きる」の中で、西村氏は、「モンゴルはモンゴル人、モンゴル族というように対象を狭くしていない。“モンゴルという土地にあるすべてのもの”であり、“モンゴルの土地”とは“遊牧文化を担う人々が住む土地”であり、これは“モンゴル人が住む土地であると同時に、多くの遊牧騎馬民族たちが活躍した土地すべて”を意味する」と記している。

そして「第1章 モンゴルというところ」において、「自然界によって支配されることを日常的に受け入れている彼らは、強者による支配を否定しない。むしろ、より力を持つものに庇護を求めることで、自分を守り、この方法によることを恥とは考えない。弱者であることを積極的に認め、弱肉強食の法則に従うのだ。これはモンゴルの土の臭いを知ったもので無ければ書くことが出来ない話なのだ。(中略)今は戦争がないとはいえ、コントロール不可能な自然の中で暮らす以上、力への信奉はそのまま彼らの基本姿勢となっている」と記している。これはモンゴルを深く知る人でなければ書けない文章だ。そこから「モンゴルとは何か」を考えると、まさに「100人いれば100通りにモンゴルがある」そして「モンゴルの人がいるところがモンゴルなのだ」と西村氏は記している。そんなモンゴルの持つ多様性、強靱なしなやかさは、草原を疾駆してきた歴史の積み重ねがあってこそではないかと思える。

3. 複眼の先にあるもの

現在のモンゴルを語る上で欠かせない視点として、モンゴルにおける「都市」の存在がある。西村氏は草原世界だけではモンゴルを語る上で、片手落ちであるという。

今日、旅行者がモンゴルに行く場合、多くが空路である。飛行機の窓から眼下に見えてくる首都ウランバートルは、草原に突如現れた都市という印象を強く与える。そして街を歩くと、都会であることに驚きさえ覚える。しかし1980年代のウランバートルは、市中を流れる河を鹿が悠々と渡る静かな町であった。その街は1991年に民主化を選択して以降、市場経済の原

理が奔流となって流れ込み、今日では多様性を見本市の観を呈している。かつてウランバートルに暮らした西村氏は、ぶつかり合う草原と都市の現在の姿を記している。

近年、ウランバートルの中央部に位置するスフバートル広場の周辺は、高層建築のラッシュである。西村氏の「ウランバートルの空が狭くなることはごめんこうむりたい」の声にまさしく同感である。

そして最近スフバートル広場に面した政府庁舎前に、チンギスハーンの巨大な像が建てられたが、その建設の背後の消息を詳しく伝えている。観光など通過者の視点からは窺うことができない話である。都市への人口の集中とともに、車両の急激な増加、冬季の大気汚染が保健衛生の面からも緊急の課題となっていて、モンゴルはまさに変化の中にある。「もうみんなおなじは通用しなくなった」と西村氏は言う。さらに草原を知らない都市の子どもたちについて憂慮の気持ちを込めて記している。都市の子どもたちは「草原での電気も水道もない生活は、未開社会の遅れた生活でウランバートルなどの都市での生活が文化的生活だと思っているようで（中略）草原の本当の価値を知るために、私たちがまた努力しなければならない」と。

4. 草原

水蒸気が煙る国日本とは対極の乾いたモンゴルの地に、我々はシルクロードに似た詩情を感じるのかもしれない。

「第3章 草原を愛す」に、旅先の草原で暇を持て余す日本人が描かれている。それに対して西村氏は「草原には何もないから面白い」と記している。その通りであるが、この空漠としていて、虚無感さえ覚える何も無い大空間は、人の心を不安にもする。それは草原の暮らしを愛するモンゴルの人にとっても同様で、白いおわんを伏せたような形のゲル（移動式天幕住居）が、草原に生きる人にとって草の海における船であることを実感する。

しかし人はその地で生きなければならない。「草原とはそこに生きるものたちに、実に多くの知恵と技術を要求するところ」だと言う。さらに「やさしさと厳しさが、ぎりぎりのところで対峙しているのが草原だ」と記している。

本書で、ウランバートルとウブルハンガイ地方をつなぐ幹線道路の舗装改良工事について触れている。道路の舗装を大胆に剥がす工事の過程で、迂回のために草原には無数の轍が生まれ、激しく草原を引掻くこととなり、広範囲で草原の環境を悪化させ、その復元も困難になっているという。遊牧を続けるために現在の草原を去った遊牧民の話が出ていた。こうした状況下で西村氏は言う「黙って自然の変化を受け入れるのは草原に生きる人々なのだ」そして「地下資源を求めて人類はありとあらゆるところを掘りまくってきた。そんななかで、モンゴル人は遊牧生活と草原を守りつづけてきたのだ」と。

草原の乾燥化、砂漠化を含め、自らの手で草原に痛手を負わせていないながらも、草原が荒れて行く被害に苦闘している遊牧民の姿が、行間から経ち現れてくる。それがモンゴルの今の姿なのだ。

5. タイガに生きる

西村氏の研究フィールドは、モンゴルにおいてツァータンの人々の住むタイガである。ツァータンと呼ばれる人々とは、モンゴルで3番目に多い民族トゥバ族だ。

そのトゥバ族に関する情報は少なく、1996年にメンヒエン・ヘルフェン著の『トゥバ紀行』が田中克彦氏の訳で、出版されたことが内陸アジアの研究者の間では大きな話題であった。

そこには「モンゴルと南シベリアの間に位置し 1921 年から 23 年間だけ独立国であったトゥバの当時の話」が紹介されていた。

ツァータンの人々は、モンゴルの北西部のタイガでトナカイを飼って暮らしている。その乳の量は少なく、さらに騎乗する。タイガはウマをはじめヒツジ、ヤギ、ウシなどのなどの草原の飼うには適さないためだ。しかし、このトナカイに騎乗して移動するにも、トナカイにはウマのような体力はないという。トナカイの活動可能な時期や地域は限られている。草原の民であるモンゴルとは異なる生活形態なのだ。そのようなツァータンを西村氏は、狩猟採取漁労活動をしている人々と紹介している。草原に暮らす遊牧民が決して行かない漁労が生活形態に入っているのだ。

「タイガの人になる」ためには植物の利用をはじめ、森に関する諸知識が必要で、それらが無ければ、かの地では生きて行くことが出来ないと記されている。そして精霊と語り合うシャーマンと呼ばれる人が、今もいるのである。北方シベリアを発祥とするシャーマンについての情報は少ない、関心のある方にはとても貴重な情報が詰まっている。

6. アルタイ山脈に生きる

標高が高いモンゴルには草原のほか、アルタイ山脈など険しい山岳地域がある。そこで山間の狭い牧草地にモンゴル族、トゥバ族と共存しなければならないがゆえに、様々な生活を工夫してきた人々がカザフ族であると西村氏は紹介している。

かの地に生きる人、イヌワシ猟などを含め、かの地に生きる動物の姿が活写されている。「人の将来に思いを馳せるという生き方は、関わった親しき人の数だけ自分の人生を豊かにしてくれる」という言葉に、モンゴルに生きる人の人生への信頼、重みが伝わってくる。「自然から得られるもののすべては、みなのものであり、人間だけのものではないと考える」。こうしたモンゴルの心を伝えるために、この本は書かれたのだと思う。

この本には、モンゴルの現在について調査研究、報告といった専門の著作からは知り得ない話が、西村氏独自の視点から書かれている。その視線はまっすぐで限りなく温かい。そのため、読み手の心持ちによって、様々な宝の詰まった箱が次々と開いていくことと思われる。読後、風を感じて、「今年はモンゴルに出かけてみよう」と思う人が増えるに違いない。

参考文献

野沢延行

1991『モンゴルの馬と遊牧民』原書房

小長谷有紀

1996『モンゴル』河出書房新社

メンヒエン・ヘルフェン

1996『トゥバ紀行』（田中克彦訳）岩波文庫

佐藤正衛

2004『北アジアの文化の力』新評論

宮脇淳子

2008『朝青龍はなぜ強いのか』WAC

風戸真理

2009『現代モンゴル遊牧民の民族誌』世界思想誌

(いしい・さとみ／酪農学園大学)